

=研究ノート=

## ジョージ・ミュラーの資（史）料と 先行研究の批判的検討

A Reexamination and Critical Consideration of George Müller's Historical Resources

木原活信

KIHARA, Katsunobu

イギリスのアシュリー・ダウン（Ashley Down）の孤児院創設者のジョージ・ミュラー（George Müller, 1805-1898）に関する文献は、「偉人伝」が大半を占める。ミュラーが19世紀の先駆的な慈善家、著名な伝道者であったゆえに、その偉業を称える伝記がその多くを占めるのは当然である。しかし一方で偉人としてのミュラー像が先行し、その実像が見えづらくなっている。そのためには、ミュラーに関する資料の整理と批判的検討と整理が不可欠である。そこで、関連資料を以下のように分類した。（1）孤児院の母体となる法人の発行した年次報告書および機関誌、（2）自叙伝（≡日誌）、（3）ミュラーの説教、言行録、（4）ミュラーの伝記、（5）ミュラーに関する研究、関連書、（6）Web上でのミュラー資料。これらは、貴重な歴史資料であり、これらのアカデミックな批判的分析により、特にキリスト教社会福祉学、社会福祉研究から「ジョージ・ミュラー研究」を生み出す可能性があることを示した。

Most of the literature on Ashley Down's orphanage founder George Müller (1805-1898) consists in 'Hagiography' or 'Great Man.' Since Müller was a pioneering philanthropist and prominent evangelist of the 19th century, unsurprisingly, the great man's biography celebrating his achievements occupies most of it. Conversely, the depiction of Müller as a great man is prevalent, and it is difficult to obtain a realistic image. To this end, it is indispensable to organise the materials related

to Müller and to critically examine them. Therefore, the related materials are classified as follows: (1) annual reports and journals, (2) autobiography, (3) Müller's preaching, (4) Müller's biography, (5) Müller's research, (6) Müller's materials online. These are valuable historical sources, and a critical historical analysis has shown that they may yield new insights from new images of Müller, especially regarding Christian social welfare and social welfare research.

## 目次

はじめに

- I 年次報告書>機関誌 (*Narrative: George Müller*)
- II *Narrative: George Müller* > 自叙伝 *Autobiography* ≒ 日誌
- III 説教、言行録
- IV 伝記
- V ミュラーに関する研究論文、研究書
- VI Web 上でのミュラー資料

まとめ

## はじめに

ブリストルのアシュリー・ダウン（Ashley Down）の孤児院創設者のジョージ・ミュラー（George Müller, 1805-1898）に関する文献には、いわゆる「聖人伝」、「偉人伝」の類が多いが、あくまでそれを一つの研究対象としてみた場合、その関連資料の取り扱いにはアカデミックな意味での整理と分類、そして批判的検討が不可欠である。ミュラーが19世紀の先駆的な孤児院創設者、著名なキリスト教伝道者であったゆえに、その偉業を称える偉人伝風の文献がその多くを占めるのはその業績を鑑みるならば当然である。しかし、一方で偉人としてのステレオタイプのミュラー像があまりに先行し、それゆえにミュラーの実像が見えづらくなっているのも事実である。

ミュラー自身の残した日誌や手紙などの一次資料や自叙伝、孤児院、関連法人の年次報告書などミュラー研究にとっては貴重な歴史資料が数多く残されており、これらの分類、整理、そしてその批判的検討ができれば「ジョージ・ミュラー研究」として、新たなミュラー像、特に、キリスト教社会福祉学、社会福祉史からの新たな発見の可能性が期待される。

そのためには、資料の批判的検討と整理が不可欠である。そこで、本稿では、ミュラーに関する資料の整理と研究資料を分析することを主眼としたい。便宜上、ミュラーにかかわる資料、文献は、概ね以下のように分類した。(1) 孤児院の母体となる法人の発行した年次報告書および機関誌、(2) 自叙伝（≡日誌）、(3) ミュラーの説教、言行録、(4) ミュラーの伝記、(5) ミュラーに関する研究、関連書、(6) Web上でのミュラー資料、である。以下、順にそれらの意義、課題、特徴等について述べていくこととする。

## I 年次報告書>機関誌 (*Narrative: George Müller*)

開設当初からミュラーの孤児事業の年次報告書は毎年発行されてきた。この発行主体は、孤児院の共同発起人であり、キリスト集会（プリマス・ブラザレン系の教会）の共同牧会者であるヘンリ・クレイク（Henry Craik, 1805-1966）とミュラーとが1834年に創設した聖書知識協会（The Scriptural Knowledge Institution for Home and Abroad : SKI と略記）である（Pierson 1899=1964 : 1）。これは一年ごとに同協会が取り組んできた事業の報告、寄附金の受領、支出の詳細、支払いなどの明細に基づく会計報告、そしてミュラーとクレイクが共同牧会したベテスタ集会（教会）の宣教・事業記録なども記載されている。

それがほぼそのままミュラーにより、1856年までに全4巻からなる『ジョージ・ミュラーに対する主の取り扱いの物語』 *A narrative of some of the Lord's dealings with George Müller*（以下、*Narrative: George Müller*）として公開し、関係者に広く配布した。これは後にそのまま公刊され全1 - 4巻のシリーズ（機関誌）としても出版された。以下の通りである。

Müller, George (1837) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume I , London: Dryden Press. = (reprint 復刻) 2006 Hamburg: Tredition (=1895年第9版を基に復刻)

Müller, George (1841) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume II , London: Dryden Press.

Müller, George (1845) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume III , London: Dryden Press.

Müller, George (1856) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume IV , London: Dryden Press.

このうち、2～4巻は年次報告書とほぼ同じ内容である。1巻は、事業開始前のミュラーの生誕から生い立ち、回心にいたる経緯としての体験談の「証し」などの半生が記されている。そのため、第1巻だけは、他の3巻とは少し性質が異なっている。

日本では機関誌 *Narrative: George Müller* はまだ翻訳されていない。それは基本的に1858年までの記録となっていて、当然ではあるが、ミュラー自身の晩年や死に至る経緯、死後の取り扱いについての記録は掲載されていない。これに記されていない晩年のミュラーの記録や死後の記録は、聖書知識協会発行の年次報告書、その他の資料、記録と照合させてその史実を埋めなければならない。

*Narrative: George Müller* の記録形式は、基本は日誌形態となっている。ミュラーがこれを公刊した時に、『ジョージ・ミュラーに対する主の取り扱いの物語』という名称を用いたのは、ピアソンも指摘する通り、おそらく新約聖書の使徒言行録（使徒行伝）の記述方法からヒントを得たからであろう（Pierson 1899=1964: 70）。それによると、「自分たちが主のためにどんな大きな働きをしたか」ということではなく、「神が自分たちと共にいて行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した」（使徒14章27節、新共同訳）というような観点を意識した内容となっているからである。つまり、神がミュラー個人をどのように取り扱ってくれたかを念頭において淡々とその出来事を記載していくという方法は、聖書の使徒言行録の著者である歴史家ルカの記述方法を意識（踏襲）したものであろう。

*Narrative: George Müller* 全体の分量であるが、原本では3000頁を超え、語彙にして約300万語（Pierson 1899=1964: 70）となっており、印刷媒体で発行されたときは1800頁からなる膨大な資料である。つまり、これがミュラーのなした事業を知る資料の一次資料の全体像ということになる。

## II *Narrative: George Müller* > 自叙伝 *Autobiography* ≡ 日誌

*Narrative: George Müller* をもとに、ミュラー本人が要約する形で自分自身の想いを中心に著述したのが自叙伝 *Autobiography* である。確かに *Narrative: George Müller* があまりに膨大な量であるので、一般の読者がこれを読むには不向きであるため分量をコンパクトに、分かりやすくまとめた形になっている。かといって、この二つには内容的に齟齬、矛盾はみられない。厳密にいうと、内容をコンパクトに要約したというよりは、*Narrative: George Müller* から重要と思われる出来事を抜粋してそのまま掲載（転載）したというのが適切であろう。

その中身は、ミュラーが過去を振り返ったうえでの書き下ろした回想や自伝というよりは、*Narrative: George Müller* に記載した内容からの抜粋であり、当時記載された日誌的記録を編集せずに原文のまま転記したという感が強い。この自叙伝のなかには当時のミュラーが受けた書簡等も原文のまま掲載されており、当時のミュラーの事情を知るうえでの重要な資料となる。自叙伝とは言え、当時を振り返っての回想録ではなく、その日その日の出来事を日誌風に記載していった *Narrative: George Müller* をもとに、それをほぼ原文のまま公刊しているので、当時の状況、全体像が分かりづらい点があるところがある。そのため、前後関係が分かりづらいところは、「注釈」という形で、「Mr. M は…」という編者者の補注を挿入するという異例の形式をとっている。これは初版の段階から編集がなされているようだが、特に初期の頃の記録では英語がネイティブでないドイツ（プロシア）人のミュラー自身の書いた英語の文章を公に出版に足るものとして文法的・語彙的に校正した可能性もある。ミュラーの英語表現は母語のドイツ語文法的表現に依拠していることが特徴的である。話者としてもドイツ語アクセントの訛りが生涯消えなかったようである (Pierson 1899=1964 : 55-56)。

ところで、この自叙伝の編者は、神学者であり、バプテスト教会牧師のヘーマン・ウェイランド（Heman Lincoln Wayland, 1830-1898）である。その父親はブラウン大学学長を務めた当時世界的に著名な経済学者フランシス・ウェイランド（Francis Wayland, 1796-1865）で、福澤諭吉がもっとも影響を受けた人物と言われている。ミュラーとも直接親交があり、初版本ではこの著名なフランシス・ウェイランドが推薦文を記載した（ただし電子版および reprint 版ではその記載はない）。このような記述形態からいわゆる過去の半生の回想をした「自叙伝」というより、編纂された「日誌」公刊のようなイメージと位置づけが強く、したがって編纂、編集に伴う補足的解説は別として一次資料としてミュラー研究の重要なものとして位置づけられよう。書誌情報は以下の通りである。Müller, George; Wayland, Heman Lincoln edited & condensed (1860) *Autobiography of George Müller - The life of Trust: Being the Narrative of the Lord's Dealings*. Boston: Gould and Lincoln = 2019 復刻版 Compass Circle.

さて、この自叙伝の中身はどのようなものであったのであろうか。年次報告書と違って孤児事業の記録や宣教の働きというよりは、ミュラー自身の生涯（半生）を軸としての記事が多く、ほぼ時系列に記載されているのが特徴的である。これはもともとアメリカの出版社の要請で出版されたが、先述したヘーマン・ウェイランドが編集に参画したのもそのためである。

いずれにせよ、この自叙伝を公開し、出版することによって、ジョージ・ミュラーの名前とアシュリー・ダウンの孤児事業が、英語圏のキリスト教関係や福祉関係者の間で知られることになった。自叙伝としては、無論これがオリジナルであるが、繰り返すがいわゆる「書下ろし」というよりも、膨大な機関誌 *Narrative: George Müller* の縮小版、抜粋版（要約）というほうが正確であろう。それで、研究対象としてみた場合、事実関係の把握にあたり正確を期すためには、*Narrative: George Müller* の記載とを総合して丹念に確認していく必要がある。先述したように内容の齟齬は基本的に見られず、事実関係におい

て両者が食い違うようなところはみられないが、文法的なレベル含めて表現が違う場合などが散見する。

この自叙伝は、*Narrative: George Müller* もそうであるが記載の仕方が、独特でありその記載方法は注意を要する。それは先述したように一つには聖書の物語的記載の叙述方法に共通点を見出すことができるようである。文学的タッチやレトリックというより、ルカの福音書や、使徒言行録のように出来事を正確に後世に記録して残していくことを強く意識した歴史学的な記載方法である。つまり、神が働きかけて人を介してなしていったわざ（出来事）を、感情面を抜きに淡々と記載していくという点に特徴がある。これはミュラーがドイツのハレ大学神学部、あるいはイギリスの聖書学校で長い間神学的訓練を経たことも影響している。またそれに加えて類まれな語学力とその才能があり、ドイツ語、フランス語、英語、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語を使いこなすことができたこともある。生涯にわたって原書（ヘブライ語とギリシャ語）で1年に4、5回も聖書を通読し、それをもとに説教してきた関係でほぼ聖書全体を丸暗記していたというほどの緻密な聖書研究の影響から生み出された記載方法であったと言ってもよい。

この点について、ミュラーの死後、資料を義理の息子ライトより委託された牧師であり、神学者のピアソンは、「あたかも靈感を受けて書いたかのようにさえ思われる。なぜなら、それは彼が自分で立てた計画や実行した働き、あるいは苦難や奉仕のことを記録したものではなく、ただ、神が彼をどのように扱い、彼を通してどのように働かれるかをしるしたものだからである」（Pierson 1899=1964：69）と述べる通りである。これをもとに文体を現代英語にして、更に読みやすく要約したものが、George Muller (1985) *The Autobiography of George Muller*, Whitaker House である。

### Ⅲ 説教、言行録

ミュラーは、孤児事業の実践家であり、キリスト教伝道者、牧師（牧会者）であったので、自叙伝的な意味の著作、孤児院や教会の報告書等を除いて、いわゆるアカデミックな研究としての著作、研究論文を残しているわけではない。しかしながら、自らが牧会する集会（教会）や他の多くの教会で招聘されての説教や、キリスト教関連団体向けの講演、そして自らの日々の言行録の多くが「ミュラーの説教、言行録」として残されている。それらは、上記の機関誌、自叙伝にも一部転載されているので重複している点もある。この「ミュラーの説教、言行録」はミュラー生前当時から同時代の関係者が読むために刊行されていた。以下の文献は現在では、電子版として再発行されているのでそのまま読むことができる。

Muller, George (1876) *Jehovah Magnified: Addresses by George Muller*. 説教・講演集

Muller, George (1876) *Jehovah Magnified: Other Addresses*. 1863～1870の説教・講演録

Muller, George (2012) *Sermons and Addresses George Müller the founder of the Ashley Down Orphan Houses, Bristol*. The Content of this work is in the Public Domain Foreword, Eternally Blessed. Amazon Kindle and is distributed by Amazon Direct Publishing. 説教・講演集

Muller, George (2015) *Convictions & Teachings*. Chapel Library. 説教集

この刊行物の目的は、ミュラーの信仰や生き方を通じて人生の教訓を得たい、霊的（宗教的）な薫陶を得たい、ミュラーの聖書の指針から学びたい、などであったが、今日では多くの言語に翻訳されて、再版を繰り返していることから

もそのニーズが依然続いていることが伺える。確認できる限りにおいて、公刊されたこの趣旨の文献の説教集として最初のもは1876年であるので、ミュラーの存命中である。

その中身は、その多くがミュラーの説教がそのままフルペーパー逐語録として公開されている。ミュラーの説教の基本スタイルは、聖書に基づき、特に聖書の原典ヘブライ語やギリシャ語の語彙や意味に丁寧に注目しつつ、自らの信仰の歩みに照らし合わせて、それらを適用し、聴衆に語り掛けるというものである。ただし、ミュラーの説教は同時代のフィニー (Charles Grandison Finney, 1792-1875)、スポルジョン (Charles Haddon Spurgeon, 1834-1892)、ムーディ (Dwight Lyman Moody, 1837-1899) らのような名説教者としてのカリスマ性はなく、またレトリックやユーモアもなく淡々と語っている。ミュラー自身も、自ら同労者のクレイクの説教の賜物を認め、自分にはそれが欠けていることも述べている (Müller 1860 : 68 ; 木原2020)。またドイツ語なまりのアクセントが相当にきつかったと言われているが、文書形式ではわからない。聖書箇所もほぼ満遍なく旧新約聖書からテーマに沿って選ばれているが、特に詩篇を講解説教として取り上げているのが目立つ。

その他の言行録も、必ずしも教会の中だけでなく、自らの実践的な教えをキリスト教関係の諸団体向けに語っているが、すべてに共通するのは聖書のある聖句や聖書の言葉に基づいて、それをそのまま事細かく自分の生活にあてはめて語るというスタイルである。このスタイルは、ネルソン・ダービ (Nelson Darby, 1800-1882) と並んでミュラーがブラザレン運動の初期のリーダーの一人であったことも影響されているのであろう。つまり、プリマス・ブラザレン系のキリスト集会の伝統的スタイルをそのまま踏襲したと言えるからである。もちろん、既に明らかにしてきたように、後にダービとミュラーは袂を分かち (Coad 2001 ; Grass 2006 ; 木原2019)、ミュラーの場合は、「集会派」としてのエクスクルーシヴ・ブラザレンの排他性に批判的であり、あくまで集会 (教

会) をオープンなものとして捉えていたので、キリスト集会の内・外という排外的な視点は強調されていない。特に取り上げている教理面の特徴については、再臨、教会、賜物としての信仰、洗礼などと多岐にわたるが、その組織神学的な教理面よりは、むしろ日常生活に根差した実際的な勧めが多い。ルター派、英国国教会と一線を画し、またダービラのエクスクルーシヴ・ブラザレンのグループと袂を分かったミュラーにしては、それらに対しての先鋭的な批判的議論はない。むしろ聖書中心主義という宗教改革者の伝統を強調し、また当時のカルヴァン主義的な側面、あるいは穏健な保守的プロテスタントの王道の立場を堅持していると言ってよい。

これらの抜粋の一部は、日本語でも翻訳がなされていて紹介されており、読むことができる。以下の文献は絶版になっているものもあるが、多くは現代でも入手可能である。

ミュラー、ジョージ著、A. E. C. ブルックス編 松代幸太郎訳 (1987) 『ジョージ・ミュラーの祈りの秘訣』 =Brooks, A.E.C, compiled *Answer to Prayer George Müller Narratives*. the Moody Press. 原本出版年代不詳（ミュラー自身による出版許可があることから1800年代後半か）

ミュラー、ジョージ著、マルコーシュ翻訳委員会訳 (1993) 『祈りの力』 マルコーシュ・パブリケーション 2012年に新版

ミュラー、ジョージ著、ランス ワベルズ 編 (2003) 『ジョージ・ミュラー信仰 (ポケット・ディボーション・シリーズ) 』いのちのことば社

## IV 伝記

### 1 ピアソンによる伝記

ミュラーに関しては多くの伝記が書かれている。A.T. ピアソン (Arthur

Tappan Pierson 1837–1911) の書いた以下の伝記は、日本語にも翻訳があるほか、多くの言語に翻訳されているが、他の多く書かれた類書の伝記と性質が異なっており、これは以下に示す理由により「別格」であると位置づけることができる。書誌情報は以下の通りである。Pierson, Arthur Tappan (1899) *George Müller of Bristol: His Life of Prayer and Faith*. London: Pickering and Inglis (= 復刻版1999, U.S.A : Kregel Publications) =アーサー T. ピアソン著 海老沢良雄訳 (1964)『信仰に生き抜いた人 ジョージ・ミュラー その生涯と事業』いのちのことば社。

このピアソンが書いた伝記にも、ミュラーの「偉人」伝的要素がないわけではないが、一方で豊富な原資料に基づく資料集的なものにもなっている。それは以下の経緯による。ミュラーの死後、遺族および聖書知識協会 (SKI) が伝記執筆のために、そのすべての資料整理その一切をピアソンに提供し、その管理と扱いを委ねることとなった。遺族と聖書知識協会は、ミュラーの伝記を記すにあたり、最適の人は誰であるのかの人選について相当に議論がなされたようであるが、1) ミュラー自身を知っている人、2) ミュラーについて客観的に記述ができる外部の人、3) ミュラーの内的世界 (神学) を十分に理解できる人物、というのが選定基準であったようである。ここで白羽の矢が立ったのが神学者ピアソンである。それではピアソンとはどのような人物であったのであろうか。

ピアソンは、当時、アメリカの長老派の牧師、神学者 (聖書学)、また説教者として著名な人物であった。生前よりミュラーとは親交をもっていたことも、彼が伝記執筆には適任とされた点である。神学的に、たとえば終末論の理解について、生前のミュラーに強く感化されている。その影響によりピアソンがこれまでとってきた神学的立場を修正したと述べるほど、ミュラーの緻密な聖書理解と神学的な影響が濃厚であった点で「親ミュラー」的人物であったと言える。ピアソンは、今日でも福音派の間に影響を与え続けているスコフィー

ルド（Cyrus Ingerson Scofield, 1843-1921）のチェーン式バイブル（Scofield Reference Bible）の顧問的立場にあり、責任アドバイザーであった。このあたりは、ブラザレンのディスペンセイション主義の影響の延長をみることができる。ピアソンは晩年には韓国に神学教授、また宣教師として赴いた。このことを記念してピアソン記念神学大学（the Pierson Memorial Union Bible Institute、今日のPyeongtaek University）が1912年に設立されていることから当時のキリスト教世界にあって大きな影響力のあるリーダー的存在の一人であったのだろう。

ピアソンは、ミュラーの伝記の序文および第6章において、伝記執筆にあたっての資料の扱いとその記載方法を克明に記している。それによると、「事実」こそが、ミュラーの伝記執筆のもっとも重要な記載基準であることなど、いわゆる「偉人伝」としてではなく、むしろ基本的に歴史学的アプローチのスタンスが取られていることが述べられている。「この「主のお取り扱いの物語」の中で最も重要視されたのは、事実の正確な記述ということ以外の何ものでもない」（Pierson 1899=1964：344）と述べる通りである。とはいえ、それはピアソンが歴史家としての厳密な歴史学的方法を採用したというよりも、ミュラー自身の記録の記載方法が執拗なまでの事実への追求（拘り）であったことによると以下のように述べている。

時には不必要とさえ思われるほどきちようめに正しく行動した。ある人は、彼が神を知るようになってからの、あるいは彼が何かの目的のために祈ることを始めてからのいろいろなできごとを述べる時、その年、月、日、そして時間までも付け加えるのを笑う。あるいは何かの仕事のために使った金額を、ポンド、シリング、ペンス、半ペンス、時には四分の一ペンス貨に至るまで非常に詳細に述べたてるのを聞いて笑うのである。また、彼のこの良心的正確さは、彼が機関誌に何かの主義原則やあるできごとを転載するような時に

も見られる。転載記事の場合は原文そのまま、一筆も変更しない。こうしたことは一見小さなことのように思われるが、実は大きな意義のあることなのだ。このような正確さによって、主のお取り扱いの記録に対する人々の絶対的な信用を獲得することができるのである。(Pierson 1899=1964 : 342)

ここに記されているピアソンの記述は、ミュラー自身の生前の性格を知る上でも重要な証言であるが、それ以上に、ここではミュラー研究としてそれに関連する資料の性質を理解するうえでも重要な証言であると言える。特に、ミュラーの並々ならぬ「事実」への拘りは、異常とまでと思えるほどに細かい数字(金銭、日付、年数)の扱いは、彼の日誌を読む者には戸惑ってしまう共通の感覚であろう。これには父親が国税局の職員であったことがその遠因の一つかは別として会計帳簿の金銭の記載のような細かい数字の記載は、普通の日誌にはそぐわないが、孤児院経営者からみればむしろ当然であったのかもしれない。しかし例えば、「〇〇の救いのために神へ祈りはじめて718日が経過した」「新生して57年116日…」などと記載されている数字への異常なまでの拘りとその表現方法は、少なくとも「普通」ではないが、歴史研究としてみた場合、その事実解明には極めて有用であり史実解明の一助となる。

そして、それは歴史研究としてのミュラー研究と位置づけるならば事実の解明と言う点では断然に有利に働く。ピアソンは以下のように更に説明する。

ジョージ・ミュラーは、正確に記述することがどんなにたいせつであるかを痛感していた。そのため、どのような犠牲を払っても正確に期することを努めた。「物語」の記述にあたっては、常に良心が支配力を握り、最高のきちょうめんさをもって真実性を確立するために、他のあらゆるものを犠牲にした。しかしそれ以上に、ある意味では、神が彼を想像に織り込まない人間にして下さったのであり、熱狂的な気質にわざわいされるということはほとんどな

かった。彼は詩人であるよりもむしろ数学者であり、芸術家であるよりもむしろ技術者であり、物を見る時にその虚飾に目を奪われることなく、正しいものを見きわめる人であった。彼は衝動家でなく熟慮型であり、興奮型でなく静穏型の人であった。 (Pierson 1899=1964 : 343) 下線筆者

とはいえ、当然、ミュラー像、およびミュラー理解においてはピアソンの主観的判断や神学的解釈がそこに含まれているのであるが、能うる限り、丁寧にミュラーの記述そのものに沿った良心的記載が特徴である。ピアソン以降、諸種のミュラーの伝記が記されているが、それはいずれもピアソンの書いた伝記の影響抜きには語れない。このことからピアソンの伝記はミュラー研究においても厳密には2次資料とはいえ、その遺族に委ねられた全資料の管理と、厳密な記載方法により、ミュラーの出来事の事実関係をはかる一つのメルクマールとなることは間違いない。よってこれも重要な研究対象として取り扱うことができるし、その必要がある。

ピアソン以外のミュラーの伝記は、他にも幾つかある。もっとも読まれ、定番になっているのが、ピアソンの著作であるが、これ以前にも、すでにミュラーの死後直後に、ワーナー (Frederick G. Warne) が伝記を書いているが、原資料に基づくピアソンのものとは異なる。Warne, Frederick, G. (1898) *George Müller: The Modern Apostle of Faith*, Fleming h. Revell Company. 近年では、ロジャー・スティーアー (Roger Steer) の以下のミュラーに関する文献も広く読まれている。Steer, Roger (1997). *George Müller: Delighted in God*. Tain, Rosshire: Christian Focus.

英語の伝記 (出版年順)

Warne, Frederick, G. (1898) *George Müller: The Modern Apostle of Faith*, Fleming h. Revell Company.

Pierson, Arthur Tappan (1899) *George Müller of Bristol: His Life of Prayer and Faith*. London: Pickering and Inglis (= 復刻版1999, U.S.A : Kregel Publications) =アーサー T. ピアソン著 海老沢良雄訳 (1964)『信仰に生き抜いた人 ジョージ・ミュラー その生涯と事業』いのちのことば社.

Harding, William Henry (1914). *The Life of George Müller*. London/Edinburgh: Oliphants. ←電子 George Müller org サイト <https://www.georgeMüller.org/> に掲載

Basil, Miller (1941) *George Muller Man of Faith and Miracles*. Zondervan Publishing House.

Garton, Nancy (1963) *George Müller and his Orphans*. Hodder and Stoughton. Revised by Churchman Publishing limited 1987.

Bailey, Faith Coxe (1980) *George Mueller (Golden Oldies)* Moody Pub.

Benge, Janet and Benge,

Steer, Roger (1997). *George Müller: Delighted in God*. Tain, Rosshire: Christian Focus.

Geoff (1999) *George Muller: The Guardian of Bristol's Orphans*. YWAM Publishing. (キリスト教児童用伝記)

Meloche, Renee Taft (2001) *George Müller Faith to Feed Ten Thousand*, YWAM publishing.

Wubbels, Lance (2002) *George Müller on Faith*, Emerald Books.

Mueller, George (2004) *A Father To The Fatherless*, JourneyForth.

Pitman E.R. (2020) *A Portrait of George Muller*. E.R. Pitman

## 2 日本でのミュラーの伝記

日本で書かれたミュラーの伝記としては、金井為一郎 (1926)『信仰の勝利者ジョージ・ミュラー』(復刻=1990 現代用語版に編集 いのちのことば

社）がある。この金井の著作は、戦後に新約社から再版されたものを遺族の許諾を得て現代語版に編纂したものである。その内容は、研究書や論文としてではなく、参考文献等の記載もないが、主に上記のピアソンの著作をベースに書かれた内容となっている。しかしながら、ところどころに金井独自の神学的解釈などが散見され、特にミュラーの回心と敬虔主義的信仰面に強調点が置かれている。「付録」として、「ミュラーの金言」が12点紹介され、これはミュラーの説教集等からそのまま引用した形となっている。

ところで、この金井為一郎（1887-1963）という人物であるが、日本基督教団の牧師であり神学者である。長野県出身で第一高等学校（現東京大学教養部）在学中に、当時校長であった新渡戸稲造の感化を受け求道をはじめ、山室軍平の説教に衝撃を受けて、日本基督教団松本教会で洗礼を受けている。ところが第一高等学校在学中に山で遭難したことを機に、献身を決意し、東京神学社で学び、朝鮮への開拓伝道に出かけるなどを経て市谷教会（現、池袋西教会）等で牧師となった。ケズイック運動などの超教派的運動にもかかわった人物でもあり、また東京聖書神学校の設立にかかわり、その初代の校長になった。著作としては、キリスト新聞社から著作集3巻も出ているが、翻訳書も多数ある。特にイギリスの著名な説教者アンドリュー・マーレー（Andrew Murray）の研究やそれを紹介した役割は大きい。マーレーの代表的著作 *The Prayer Life* を翻訳した『祈りの生活』（いのちのことば社1985）は今日でもキリスト教書の古典として親しまれている。

当時のキリスト教界でリーダーの一人であったこの金井が書いたミュラーの伝記は、広く読まれ、日本には金井の文献を通じてミュラーが広く紹介されたといつてよい。その意味では日本のミュラー像は、金井を通じたミュラー像であり、ミュラー研究においては相対化していく必要がある。その他の伝記類は児童書も含めると以下の通りである。

日本の伝記（出版年順）翻訳含む

金井為一郎（1926）『信仰の勝利者ジョージ・ミュラー』（復刻＝1990 現代用語版に編集 いのちのことば社）

ピアソン,アーサー T 著、海老沢良雄訳（1964）『信仰に生き抜いた人 ジョージ・ミュラー その生涯と事業』いのちのことば社＝Pierson, Arthur Tappan（1899）*George Müller of Bristol: His Life of Prayer and Faith*. London: Pickering and Inglis.

ベリー、フェース・コックス著鈴木徹郎訳（1964）『若い反抗者』伝道出版社＝Faith Coxe Bailey（1958）*Young Rebel in Bristol : The Life of George Muller written especially for Young Christians*, Moody Press.

玉木 功（1983）『世界の孤児院の父 ジョージ・ミュラー』（豊かな人生文庫 少年少女信仰偉人伝）教会新報社

タラック、ジョン著、鞭木幸子訳（2009）『神に用いられた生涯』いのちのことば社＝1973, John Tallach, *God made them Great*（偉人伝の一人として）

## V ミュラーに関する研究論文、研究書

これまで述べてきた通り、ミュラーについての伝記は多数あっても、研究対象としてのミュラー研究というのは少ない。もちろん、ここで「研究」の定義如何にもよるが、神学、宗教学、歴史学、社会福祉学などがミュラーを研究として扱うのに適している領域の主なものとなろうが、それぞれの学問領域でも、ミュラーを研究対象として扱うことは稀である。もちろん断片的にミュラーが扱われることがなかったわけではないが、いずれもミュラー自体を中心にしているわけではない。伝記類ではなくても、ミュラーを取り上げている多くの場合、「研究」というよりは、ミュラーの生き様からの教訓、知恵などについて述べられているものは少なくない。

たとえば、アメリカの牧師ロジャー・スティア（Roger Steer）は、ミュラーの伝記、子供向けのミュラー伝も書いているが、それだけではなく、ミュラーを通じて、現代においても生きた「神体験」（Experience of God）（Steer 1985）を追体験ができることを強調してそれを奨励する著作を公刊している。また、ミュラーの経験から「神を敬うことの意味」についてその今日的意義を述べる（Steer 1986）など、キリスト教弁証論（Christian Apologetics）の立場でミュラーを取り上げている。以下のものがスティアの書いた文献である。

Steer, Roger (1975). *George Müller: Delighted in God*. Hodder and Stoughton (Revised by Christian Focus Publications in September 1997.)

Steer, Roger (1984) *George Müller Heroes of the Cross*, Marshall Morgan & Scott

Steer, Roger (1985) *A Living Reality of George Müller's Experience of God*. Hodder and Stoughton

Steer, Roger (1986) *Admiring God: the best of George Müller*, Hodder and Stoughton

また、近年の神学的研究としてはジョン・パイパー（John Piper, 1946～）の以下のものがある。パイパーは、アメリカ改革派の神学者であり、近年、キリスト教界に最も影響のある説教者の一人として挙げられている人物であるが、特に世界的に福音派への影響は大きい。パイパーはミュラーを聖者や偉人としてというより、あくまでプラグマティックに捉えて、その生き様が宣教に対する有効な「戦略」となることを論じており、その秘訣は「神への信仰の単純さ」であり、それが逆説的に人々に「神を証明する」もっとも効果的な方法であることを神学的立場から論証しようとしている。John Piper George (2004) “Mueller’s Strategy for Showing God: Simplicity of Faith, Sacred Scripture,

and Satisfaction in God” “2004 Bethlehem Conference for Pastors Desiring God, eText Olive Tree Bible.

また、ミュラーを題材にした稀少な博士論文としてデュアン・レンツ (Duane Lenz) の以下のものがある。Lenz, Darin Duane (2003) *Strengthening the Faith of the Children of God: Pietism, Print, and Prayer in the Making of a World Evangelical Hero, George Müller of Bristol (1805-1898)* Ph.D. Kansas state university. この論文は、アメリカのカンザス州立大学に2003年に提出された歴史学の博士学位論文である。ミュラーがいかにして世界的な福音派の「英雄」としての位置を確立したのかの経緯について、ドイツ敬虔主義を起点としつつ、詳細にわたって検討しているが、特に福音派のトラクトと呼ばれる広報媒体の有効性と戦略などから、丁寧に議論した点にその特徴がある。

レンツが、キリスト教福音派の歴史としてのミュラーを議論した点は重要な課題を提起しており高く評価できるが、ミュラーの孤児事業についての社会福祉学やソーシャルワークの位置づけ、ブラザレン運動との関連の分析はみられない。

これらの研究動向を踏まえて、従来 of 偉人伝の枠を超えて、「ジョージ・ミュラー研究」として筆者は研究をすすめてきた。これまで既に学術雑誌等にその成果を示してきたが、以下の7点である。

木原活信 (1993) 「同志社のアイロニー —山室軍平の中途退学—」『新島研究』第82号.

木原活信 (1999) 「ジョージ・ミュラーが石井十次に及ぼした影響」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋出版.

木原活信 (2018) 「ジョージ・ミュラーの思想形成におけるフランケの敬虔主義の影響について」『評論・社会科学』(127) 1-17.

木原活信（2019）「英国初期ブラザレン運動とジョージ・ミュラー —その分裂と挫折が福祉実践思想形成に及ぼした影響をめぐって—」『キリスト教社会問題研究』68号 1-33.

木原活信（2020）「ジョージ・ミュラーの来日をめぐる日本のキリスト教界の反応と社会福祉史への影響」『キリスト教社会問題研究』69号 1-30.

木原活信（2021）「ジョージ・ミュラーの青年時代の迷走と回心—孤児院創設に至る軌跡（1805-1835）—」『評論・社会科学』137号 119-149.

これらの一連の研究により、「ジョージ・ミュラー研究」を試みている。特にこれまで等閑視されてきたミュラーの思想形成過程、日本のキリスト教界、そして社会福祉史のなかでの位置づけ、その歴史的影響について明らかにしようとした。これまでの伝記類が語る偉人としてのミュラー像から離れることから出発し、彼の青年時代を分析し、その盗癖、虚言、反抗といった非行行為と放蕩した挙句に逮捕されて監獄生活を送った罪の原点を起点とし、同時に劇的な回心の経緯の意味とその後の人生に与えた影響を分析した（木原 2021）。また初期の孤児院経営についても、その壮絶なまでの窮乏、自転車操業による経営悪化、そして自ら「頭の病気」という神経症状に悩まされつつも、愚直なまでに神に頼み生きようとする姿。これらは2000人の孤児を養う大規模な施設であり、のべ10026人の孤児を養うことができた「奇跡」的孤児院創設者や英雄には似つかわしくない「脆さ」と「弱さ」の典型とも言えるが、むしろここにこそ人間としてのミュラーの姿をみた。また、ドイツ敬虔主義のフランケに影響されて孤児院を着想するに至り、ブリストルにおいて孤児院開設にいたる詳細の経緯を示した（木原 2018）。またミュラーとブラザレン運動に着目した。これがその後のミュラーの牧会者、伝道者、孤児院事業家としての彼に決定的に影響を与えた経緯について明らかにした（木原 2019）。

また、これまで顧みられることのなかった日本との影響についても射程に入

れ、1886年～1887年の来日の足跡を実証的に明らかにし、受け入れ側の日本の教会の当時の反応、およびその後の社会福祉界とのかかわりに関する全体像を議論した。特に「謎」のように立ち現れるミュラーをめぐる新島襄の対応に焦点をあてた。それは新島襄が序文を書いた小冊子『ジョージ・ミューラル氏小伝并演説 信仰の生涯』の刊行にいたる経緯である。そして、山室軍平、石井十次という日本を代表する社会事業家に影響及ぼすことになった経緯について実証的にその詳細を明らかにした（木原2020）。こうして、日本のキリスト教界および社会福祉の歴史におけるジョージ・ミュラーの影響とその位置づけを明示させた。

## VI Web 上でのミュラー資料

ミュラーの資料については、以下の幾つかのサイトが組織的に情報を公開している。以下のサイトは、特に重要である。

George Müller 資料館公式サイト <https://www.mullers.org/>

このサイトは、ミュラーが1834年に創設した母体となる聖書知識協会（SKI）の公式サイトであるが、ミュラーの孤児院時代の歴史的資料から現代の財団の支援等の情報を読むことができる。

ミュラーの孤児院は1950年に、その役割を終えたとして孤児院は解散した。現代の社会福祉、ソーシャルワークの専門的見地から孤児院の大規模化は必要ないとされ、小規模化、グループホーム化がすすみ、更に養子縁組、里子として紹介がすすめられたからである。また高齢者福祉サービス事業に参入し、そこでデイ・サービス、高齢者福祉ホームなど的高齢者福祉分野が展開されている。聖書知識協会は現在でも、ミュラーの創設した初期の目的を維持し、国内、海外宣教の支援、福祉支援、そして聖書とトラクトの配布などを続けてい

る。また、ミュラーを記念して、ジョージ・ミュラー博物館（資料館）を開設し、ミュラーおよび孤児院の資料の閲覧、提供なども実施しているが、その一環としてホームページも開設している。

このホームページの目的と趣旨は、19世紀のジョージ・ミュラーの偉業をアーカイブ化して後世に残す点、今日においてもその生き様から啓発的な学びを提供しようとする点、そしてミュラーの活動を継承する財団として広報活動の目的がある。それは学術目的ではないが、公式サイトとして、ミュラーの歴史的史実を正確に配信しているため、それらの諸情報は参考になる。

George Müller org サイト <https://www.georgemuller.org/>

このサイトは、アーカイブ化された説教集、資料集などについて公開しているサイトである。ジョージ・ミュラーの歴史的功績を紹介することを通して、キリスト教のリバイバルや宣教を目的としたものであるが、資料は豊富であり、古典的な資料もみることができる。その趣旨は以下のようにサイトで紹介されている。「この Web サイトは、神の栄光を現すことを目的とし、キリストが崇められ、キリスト者を奨励し、未信者への福音伝道を提供する」(This web site is dedicated to the glory of God; the exaltation of Christ; the edification and encouragement of the believers; and evangelism to the lost.) とされているが、ミュラーに関する貴重な歴史的資料を紹介している。

ブラザレン運動系の web サイト

そのほか、ミュラーが1830年代から深くかかわったプリマス・ブラザレン系の資料に特化して、そのアーカイブ化をしているサイトがある。これらは、ミュラーについても、ネルソン・ダービとともにその運動初期の最重要な位置づけとしてとりあげている。現在に連なるキリスト集会の系譜としてオープン・ブラザレン系の重要人物の一人として資料保存をしている。なお、ブラザ

レン運動とミュラーについては、すでに明らかにしている（木原2019）。

The Brethren Archivists and Historians Network (BHAN) 公式サイト  
<http://brethrenhistory.org/home.htm>

The University of Manchester Library, “Christian Brethren Archive” 公式サイト  
<https://www.library.manchester.ac.uk/search-resources/special-collections/guide-to-special-collections/christian-brethren-collections/>

## まとめ

本稿においては、ブリストルのアシュリー・ダウン（Ashley Down）の孤児院創設者のジョージ・ミュラーに関する資料を分類整理し、その批判的検討をしてきた。ミュラーに関する文献は、ミュラーが19世紀の先駆的な孤児院創設者、著名なキリスト教伝道者であったことで、故人の偉業を称える偉人伝風の伝記がその多くを占める。それゆえに、社会科学的視点が欠落しており、その実像が明らかでない。その一方で、本稿で議論してきたように、ミュラー自身の残した日誌や手紙などの一次資料や自叙伝、孤児院、関連法人の残した年次報告書など貴重な歴史資料が数多く残されている。それらを批判的に分析することを通して、「偉人ミュラー」では明らかにされなかった「ジョージ・ミュラー研究」の可能性が開かれることになる。とはいえ、それらはミュラーのなした事業の「偉大さ」を否定するものではなく、むしろ改めてその確かさを歴史的に再確認する作業の一つでもあるとも言える。19世紀のイギリス社会のなかで苦悩しつつも、天の助けを求めて懸命に世俗社会に抵抗して生き抜こうとした一キリスト者としての人物像など、特にキリスト教社会福祉学、社会福祉史から新たな鉱脈を発見する可能性がある。

参考文献

- Bailey, Faith Coxe (1980) *George Mueller* (Golden Oldies) Moody Pub.
- Benge, Janet and Benge, Geoff (1999) *George Muller: The Guardian of Bristol's Orphans*. YWAM Publishing. (キリスト教児童用伝記)
- ベーリー、フェース・コックス著鈴木徹郎訳(1964)『若い反抗者』伝道出版社 = Faith Coxe Bailey (1958) *Young Rebel in Bristol: The Life of George Muller written especially for Young Christians*, Moody Press.
- Coad, Roy, A History of the Brethren Movement, 2nd ed. Exeter: Paternoster Press, 1976.
- Garton, Nancy (1963) *George Müller and his Orphans*. Hodder and Stoughton. Revised by Churchman Publishing limited 1987.
- George Müller org 公式サイト <https://www.georgeMüller.org/> (2021年3月1日閲覧).
- George Müller 資料館公式サイト <https://www.Müllers.org/> (2021年3月1日閲覧).
- George Mueller: Father of ten thousand orphans. Eternal Light Tract 写真入りの資料集
- Grass, Tim (2006) *Gathering to His Name: the Story of Open Brethren in Britain and Ireland*, London: Paternoster Press.
- Harding, William Henry (1914). *The Life of George Müller*. London/Edinburgh: Oliphants. ←電子 George Müller org サイト <https://www.georgeMüller.org/> に掲載
- 金井為一郎 (1926)『信仰の勝利者ジョージ・ミュラー』(復刻=1990 戦後に新約社から再版されたものを現代語版に編纂 いのちのことば社)
- 木原活信 (1993)「同志社のアイロニー —山室軍平の中途退学—」『新島研究』第82号.
- 木原活信 (1999)「ジョージ・ミュラーが石井十次に及ぼした影響」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋出版.
- 木原活信 (2018)「ジョージ・ミュラーの思想形成におけるフランケの敬虔主義の影響について」『評論・社会科学』(127) 1-17.
- 木原活信 (2019)「英国初期ブラザレン運動とジョージ・ミュラー —その分裂と挫折が福祉実践思想形成に及ぼした影響をめぐって—」『キリスト教社会問題研究』68号 1-33.
- 木原活信 (2020)「ジョージ・ミュラーの来日をめぐる日本のキリスト教界の反応と社会福祉史への影響」『キリスト教社会問題研究』69号 1-30.
- 木原活信 (2021)「ジョージ・ミュラーの青年時代の迷走と回心—孤児院創設に至る軌跡 (1805-1835) —」『評論・社会科学』137号 119-149.
- Lenz, Darin Duane (2003) "Strengthening the Faith of the Children of God: Pietism, Print, and Prayer in the Making of a World Evangelical Hero, George Müller of Bristol

(1805-1898) “ Ph.D. Kansas state university.

Meloche, Renee Taft (2001) *George Müller Faith to Feed Ten Thousand*, YWAM publishing.

Miller Basil (1941) *George Muller Man of Faith and Miracles*. Zondervan Publishing House.

Müller, George (1837) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume I, London: Dryden Press. = (reprint 復刻) 2006 Hamburg: Tredition (= 1895年第9版を基に復刻)

Müller, George (1841) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume II, London: Dryden Press.

Müller, George (1845) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume III, London: Dryden Press.

Müller, George (1856) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume IV, London: Dryden Press.

Müller, George; Wayland, Heman Lincoln edited & condensed (1860) *Autobiography of George Müller -The life of Trust: Being the Narrative of the Lord's Dealings*. Boston: Gould and Lincoln =2019 復刻版 Compass Circle.

Müller, George (1876) *Jehovah Magnified: Addresses by George Muller*. 説教・講演集

Müller, George (1876) *Jehovah Magnified: Other Addresses*. 1863~1870の説教・講演録

Mueller, George (2004) *A Father To The Fatherless*, JourneyForth.

Müller, George (2015) *Convictions & Teachings*. Chapel Library. 説教集

Müller, George (2012) *Sermons and Addresses George Müller the founder of the Ashley Down Orphan Houses, Bristol*. The Content of this work is in the Public Domain Foreword, Eternally Blessed. Amazon Kindle and is distributed by Amazon Direct Publishing. 説教・講演集

Müller, George (2009) *Valuable Selections from the Wittings of George Müller*. Granted Ministries Press. (抜粋)

ミュラー、ジョージ著、マルコーシュ翻訳委員会 (1993) 訳『祈りの力』マルコーシュ・パブリケーション 2012年に新版

ミュラー、ジョージ著、A. E. C.ブルックス編、松代幸太郎訳 (1987) 『ジョージ・ミュラーの祈りの秘訣』=Brooks, A.E.C, compiled *Answer to Prayer George Müller Narratives*. the Moody Press. 原本出版年代不詳 (ミュラー自身による出版許可があることから1800年代後半か)

ミュラー、ジョージ著、ランス ワベルズ 編 Lance Wubbels (2003) 『ジョージ・ミュラー信仰 (ポケット・ディボーション・シリーズ)』いのちのことば社

Parsons, Charles R. (2014) *An Hour With George Müller*, Chapel Library edited by

A.Sims

Pierson, Arthur Tappan (1899) *George Müller of Bristol: His Life of Prayer and Faith*. London: Pickering and Inglis (= 復刻版1999, U.S.A : Kregel Publications) =アーサー T. ピアソン著 海老沢良雄訳 (1964) 『信仰に生き抜いた人 ジョージ・ミュラーその生涯と事業』いのちのことば社

Pitman E.R. (2020) *A Portrait of George Muller*. E.R. Pitman

Steer, Roger (1975). *George Müller: Delighted in God*. Hodder and Stoughton.

(Revised by Christian Focus Publications in September 1997.)

Steer, Roger (1984) *George Müller Heroes of the Cross*, Marshall Morgan & Scott.

Steer, Roger (1985) *A Living Reality of George Müller's Experience of God*. Hodder and Stoughton.

Steer, Roger (1986) *Admiring God: the best of George Müller*. Hodder and Stoughton.

Susannah Grace Mueller (1883) *Preaching Tours and Missionary Labours of George Müller*, London: J. Nisbet & Co., Berners Street.

玉木功 (1983) 『世界の孤児院の父 ジョージ・ミュラー』(豊かな人生文庫 少年少女信仰偉人伝) 教会新報社

タラック、ジョン著 鞭木幸子訳 (2009) 『神に用いられた生涯』いのちのことば社 = 1973, John Tallach, *God made them Great* (偉人伝の一人として)

Taylor, W. Elfe (2017) *Passages from the Diary and Letters of Henry Craik*. With an introduction by Mr. George Müller. HardPress. = (1866) J.F.Shaw & Co., Paternoster Row (復刻電子版)

Warne, Frederick, G. (1898) *George Müller: The Modern Apostle of Faith*, Fleming h. Revell Company.

Warne, Frederick G. and Bergin, G. Fred (1911) *George Müller : the modern apostle of faith and his successors, the late Mr. James Wright & Mr. G.Fred. Bergin*, Burleigh,S. W. Partridge (国内では同志社大学図書館だけが所蔵)

Wubbels, Lance (2002) *George Müller on Faith*, Emerald Books.  
保持していない文献

Groves, Edward Kennaway (1906). *George Müller and His Successors*.

Ellis, James J. (1912). *George Müller*. London: Pickering & Inglis.

\*なお、本研究は JSPS 科研費 JP19H01601の助成を受けています。

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP19H01601.

(第20期第1研究会による成果)